中山瓦窯の調査
―第586次

1　はじめに

本調査は、史跡奈良山瓦窯跡の中山瓦窯跡西方隣接地における住宅の新築工事にともなう保存目的の発掘調査である（図260）。調査区は建替住宅の敷地内において、建物の建設位置を含む南北６ｍ、東西９ｍの計54㎡の範囲を設定した。調査区東端にて、灰原が調査区外東方に延びることを確認したため、南北3.5ｍの幅で、東側に１ｍ拡張した。調査面積の合計は57.5㎡。調査期間は2017年４月17日から20日までである。地表下約15㎝まで攪乱を除去し、遺構は地山面で検出した。なお本調査は遺構面と遺構の広がりの確認を主目的としており、遺構および攪乱の掘削は最小限にとどめた。調査区西半はほぼ攪乱および近現代の盛土で、調査区の東半分で奈良時代の遺構を検出した（図261）。

2　基本層序

調査区の東方及び北方は丘陵であるが、切土によって現状の調査地は平坦である。基本層序は、地表から表土（約５㎝）、攪乱土（約15㎝）、地山（明黄褐色シルト）の順で、南半の一部に整地が広がっており、地山は緩やかに南に向かって下がる。

3　検出遺構

調査区東部から南部に広がる灰原を検出した。また調査区の一部および断面での確認にとどまるが、調査区東端で窯体、南北に並ぶ瓦列１条、瓦窯の床土、調査区東部で瓦窯にともなう排水溝などを検出した（図262）。

瓦窯SY370　調査区東部において平面・断面で部分的に検出した瓦窯。焚口部の窯体および窯体の据付、床面、灰原SX371A・Bを確認した（図263）。窯体は２回分を検出しており、新しいものは高さ約10㎝、幅約15㎝で、南北約1.2ｍ分を確認した。その据付は幅約30㎝、深さ約15㎝で、平面および断面で確認した。また断面において窯体および窯体の据付の下部に深さ15㎝以上の床面を確認した。古い窯体は高さ約30㎝、幅約25㎝で新しい窯体の据付に一部壊される。

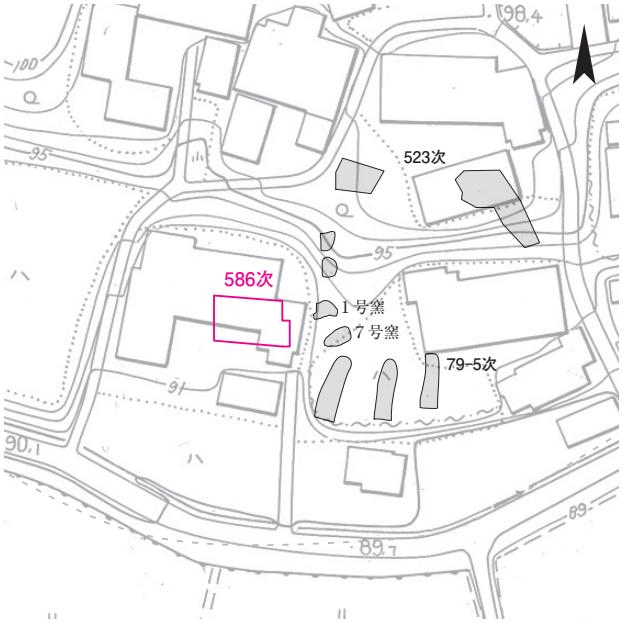

図260　第586次調査区位置図　1：1000

図261　第586次調査区全景（北から）

なおSY370の前面（西方）に位置する南北瓦列SX372・南北溝SD374～377は瓦窯SY370にともなうもので、瓦窯の前面に設けられた排水溝とみられる。

灰原SX371A・B　SX371Bは調査区の南部から東南部にかけて平面で検出した灰原（図262・264）。断面で確認した厚さは約５～12㎝。SX371Aは調査区南部中央付近と東南部の断面で確認した灰原で、厚さは10㎝以上。SX371A・Bの間に２時期分の整地（以下、上層整地・下層整地とする）を確認した。

南北瓦列SX372　窯体の西方の瓦列で溝状に南北に並び、幅約30㎝で約3.4ｍ分を検出した。灰原SX371Ｂと重複する部分ではSX372が灰原SX371の上に位置する。断面を確認できていないが、ごく浅い溝とみられ、北端は削平、南端は攪乱により壊されている。

東西溝SD373　東端がSX372に接続する幅約25㎝の東西溝。西端は攪乱により壊される。約0.5ｍ分を検出した。

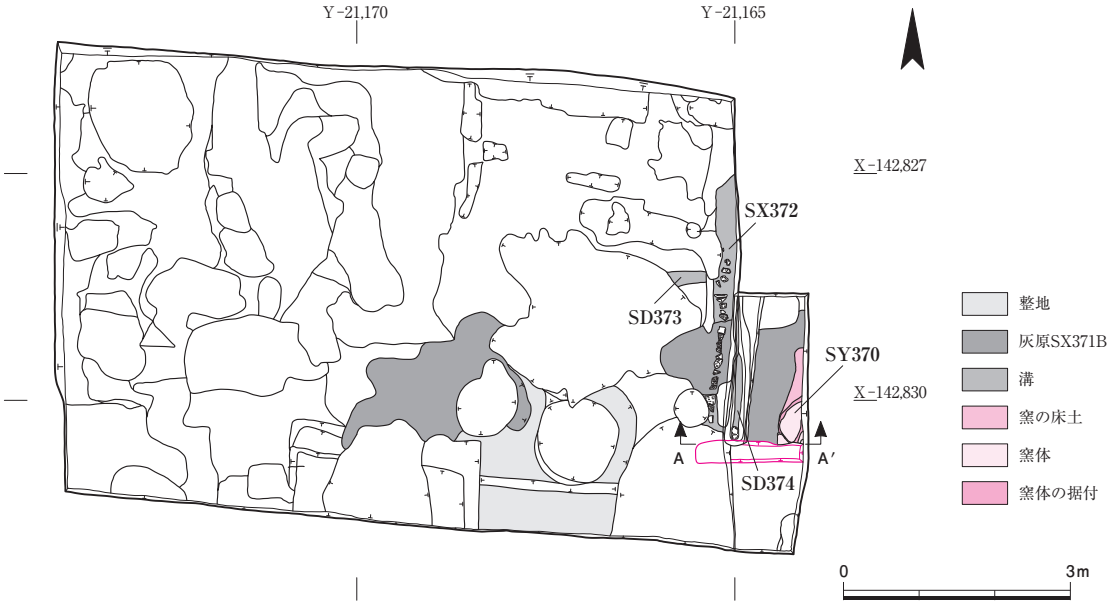

図262　第586次調査区遺構図　1：100

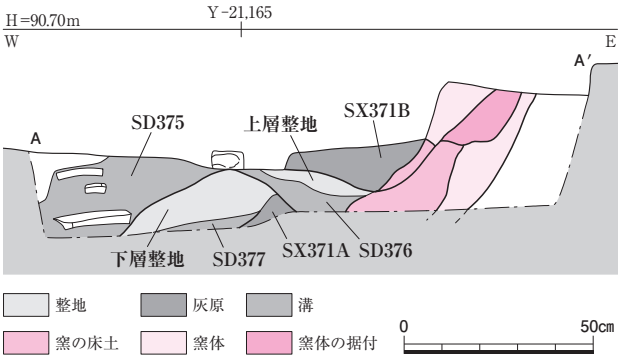

図263　SY370断面図　1：20

図264　調査区東部の窯体・灰原（南西から）

南北溝SD374　調査区東南部の平面で確認した南北溝。幅約30cm、深さ約５cmで、約２m分を検出し、南端部に焼土の塊が遺存する。

南北溝SD375　調査区東南部の断面で確認した南北溝。幅約30cm、深さ約20cm以上で下層の整地より掘り込む（図263）。

南北溝SD376　調査区東南部の断面で確認した南北溝。幅約50cm以上、深さ約20cm以上で下層の整地より掘り込まれ、上層の整地に覆われる（図263）。

南北溝SD377　調査区東南部の断面で確認した南北溝。幅約25cm以上、深さ約５cm以上で下層の整地に覆われる（図263）。　**（海野　聡）**

４　出土遺物

奈良時代の瓦を主体とした丸瓦・平瓦、磚および奈良時代の土師器・須恵器片が少量出土した。　**（岩戸晶子）**

５　ま と め

本調査により中山瓦窯の遺構が西方に展開することがあきらかになった。今回検出した瓦窯SY370の窯体は、中山瓦窯の１号窯の南壁の端部にあたる可能性があり[1)]、南北の瓦列SX372は瓦窯の前面に設けられた排水溝の底部と考えられる。灰原SX371Aも一部、攪乱で途切れているが、窯体から一連で続いており、１号窯と一連の遺構と推察される。また平面および断面で少なくとも２基の窯体、２回の整地、２時期分の灰原SX371A・B、４条の南北の排水溝SD374・375・376・377を検出しており、焚口部の改修が複数回おこなわれたことがわかる。本調査では部分的な検出にとどまったが、SY370およびその他の瓦窯の改修を含めた総合的な検討については今後の発掘調査に期待したい。　**（海野）**

註

１）平城第79-5次で検出した１号窯の延長線上からやや位置が南方にずれるため、７号窯の可能性も考えうる。